文部科学省科学技術・学術審議会大学研究力強化委員会 (第12回)

資料２-３
科学技術・学術審議会
大学研究力強化委員会
（第12回）R5.6.28

2040年の科学・学術と社会を見据えて取り組むべき10の課題

～イノベーション・越境研究・地域連携・国際連携・人材育成・研究環境～（中間報告）

小野悠

日本学術会議連携会員・25期若手アカデミー幹事

豊橋技術科学大学・准教授／学長補佐

若手アカデミー紹介

第25期若手アカデミー

日本学術会議若手アカデミー（Young Academy of Japan）は、人文・社会科学と自然科学にまたがる多様な分野にわたる45歳未満の研究者で構成

25期の体制と活動（2020.12-2023.9）

1. 具体的な諸問題に取り組む8つの分科会活動
   - 人材育成、業界体質改善、越境、国際、地域活性化、イノベーション、GYA総会、情報発信
2. 分野横断的かつ公的な若手研究者の組織としてのシンクタンク活動・発信
3. 日本学術会議の活動や発信への若手研究者視点の反映

全体委員数：51名（うち特任連携会員：8名）

8つの分科会

分科会名	活動目的・内容
イノベーションに向けた社会連携分科会	「イノベーション」の概念整理、現時点で優先すべきイノベーション、イノベーションを起こすために必要なもの、イノベーションを拒むものについて議論
越境する若手科学者分科会	若手科学者の間の研究交流を図り、既存の発想にとらわれない科学分野間の融合によって革新的な研究展開が生じうる新規領域やそれらが生む未来社会のビジョンの提案、新しいテクノロジー等を用いた市民との交流の実践
地域活性化に向けた社会連携分科会	地域社会における科学者の役割を幅広く検討し、多様な主体との対話を重ねることで、科学と地域社会の持続的な関係性を再定義し、実現方策を検討
国際分科会	世界における日本の学術の役割、世界におけるわが国の学術をどのように進めていくべきかについて、他国の若手アカデミー等との交流を通じて若手科学者の立場から検討
学術の未来を担う人材育成分科会	高等教育が担う教養教育・専門教育の社会的価値を多角的に評価するための調査・議論、大学院生が効果的な教育を受け研究に専心できる環境を構築するための調査・議論や精神的・経済的な環境に対する枠組みの検討
学術界の業界体質改善分科会	学会活動にかかる時間的負担やその他の慣例的な業務負担など、学術界の様々な「業界体質」の可視化とその改善に向けた調査・議論
情報発信分科会	幅広い利害関係者をステークホルダーと捉え、若手アカデミーに関する理解や認識を得ながら対話し、双方向的なコミュニケーション活動を目指す
ＧＹＡ総会国内組織分科会	国際的若手学術組織であるグローバルヤングアカデミーと共に、科学技術の未来や世界規模の社会課題の解決を考えるGYA総会兼学会を日本で開催

主な取り組み

若手研究者の意見の取り込み

日本学術会議の審議への参加

地域関係者やイノベーションアクセラレーターとの意見交換

世界の若手研究者との議論

ミッション

20年後の科学・学術と社会を見据えたリモデリング戦略

各分科会での議論・活動をもとに、人文・社会科学と自然科学にまたがる幅広い専門性からの知見を集約することで、 20年後の科学・学術と社会を見据えた「リモデリング戦略」を提示

（中間報告）

2040年の科学・学術と社会を見据えて取り組むべき10の課題

～イノベーション・越境研究・地域連携・国際連携・人材育成・研究環境～

我が国のイノベーション創出を科学・学術の立場から支えるために

我が国のイノベーション創出を科学・学術の立場から支えるために

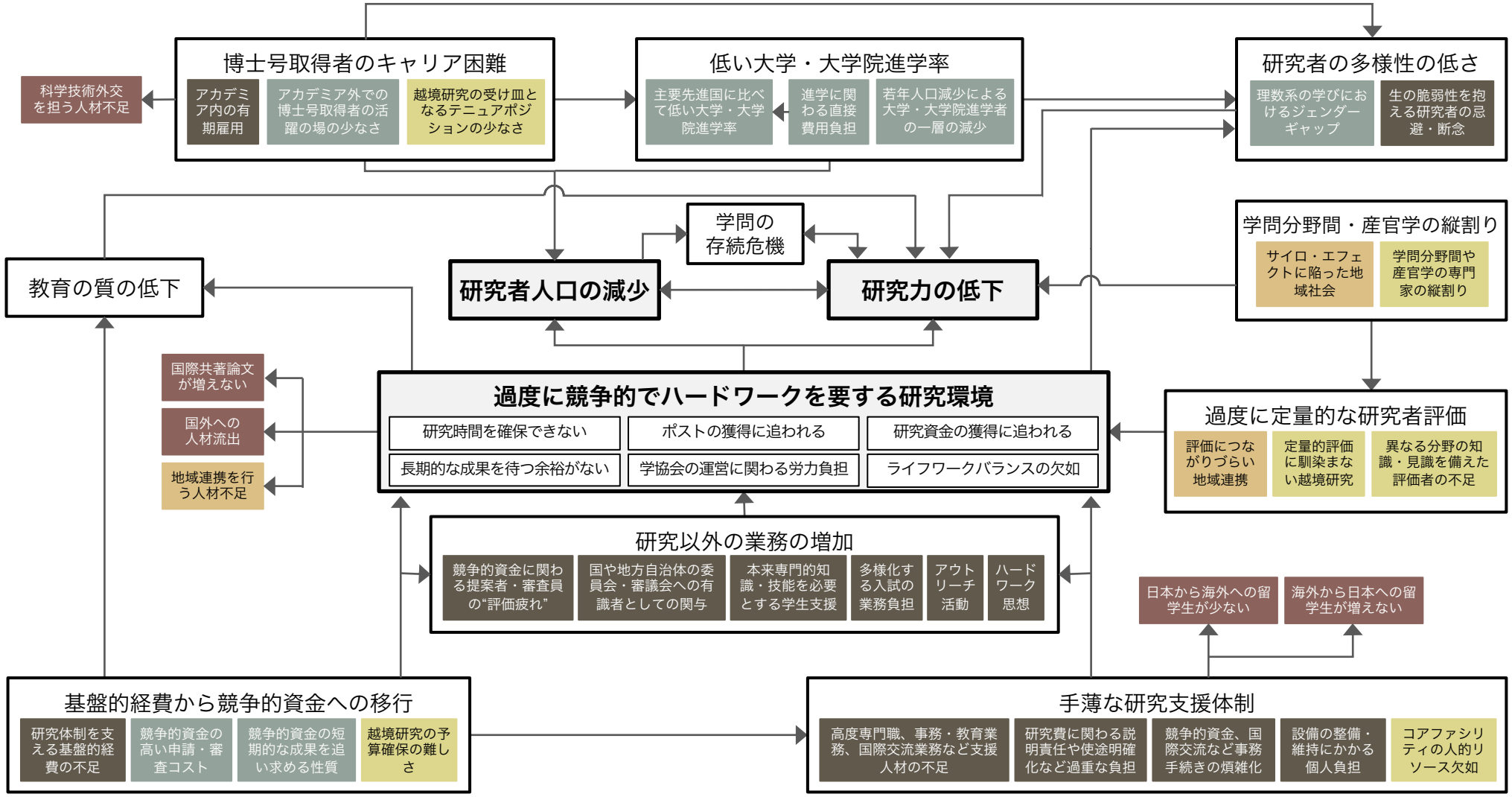
2040年の科学・学術と社会

いまこそ研究環境・業界体質を改善し、人材育成・キャリアパス整備を推進しなければ、越境研究・国際連携・地域連携は推進されず、今後20年間にわたる我が国からのイノベーションの創出も期待できない

研究環境・業界体質の改善

我が国のイノベーション創出を阻む要因

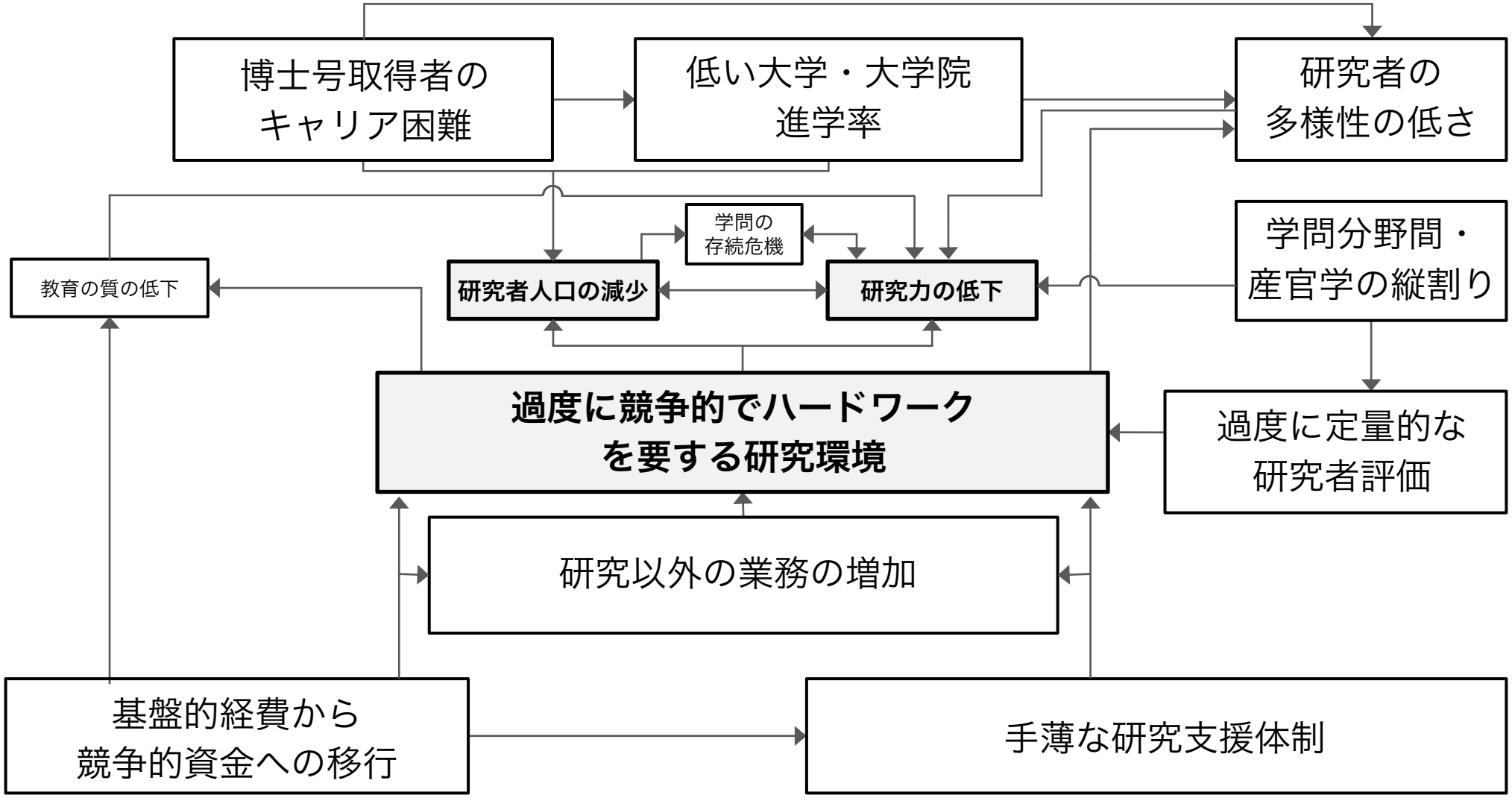
【背景】　人口減社会：若年人口減少→潜在的な大学・大学院進学者の減少、労働生産人口の減少→人材獲得競争の激化
地域課題解決の担い手の不足と地域の社会・経済を支える環境の劣化・損失という負のスパイラル
科学・学術、産業、外交などにおける国際的地位の低下



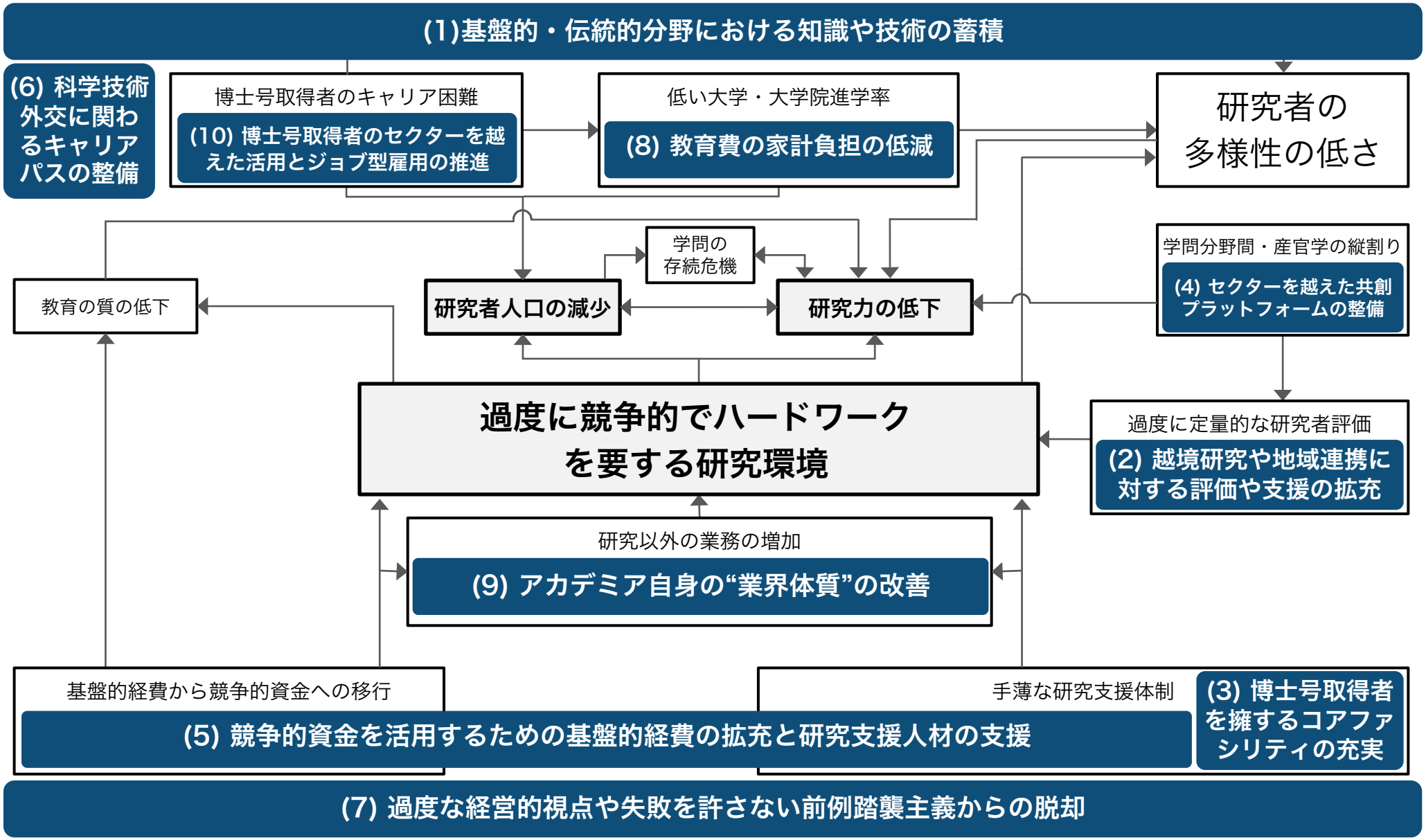
越境研究に関わる現状・課題　地域連携に関わる現状・課題　国際連携に関わる現状・課題　人材・キャリアパスに関わる現状・課題　研究環境・業界体質に関わる現状・課題

我が国のイノベーション創出を阻む要因

【背景】　人口減社会：若年人口減少→潜在的な大学・大学院進学者の減少、労働生産人口の減少→人材獲得競争の激化
地域課題解決の担い手の不足と地域の社会・経済を支える環境の劣化・損失という負のスパイラル
科学・学術、産業、外交などにおける国際的地位の低下



イノベーション創出のために今取り組むべき10の課題



イノベーション創出のために今取り組むべき10の課題

(1)　基盤的・伝統的分野における知識や技術の蓄積

基盤的・伝統的分野における知識と技術の蓄積こそが我が国の学術研究の根底をなす豊かな土壌であり、その維持と発展が決定的に重要

(2)　越境研究や地域連携に対する評価や支援の拡充

学際的な越境研究や、地域課題を解決するための学術活動を長期的な時間スケールで的確に評価するシステムの確立や、ポストや予算のさらなる措置が急務

(3)　博士号取得者を擁するコアファシリティの拡充

業務過多の中でも多様な人材が活躍し、重要な研究課題に集中するために、諸外国と同様に高度な技術者を擁するコアファシリティの拡充が急務

(4)　セクターを越えた共創プラットフォームの整備

アカデミアが産業界・行政・地域社会と連携し、重要な領域横断的課題を力を合わせて解決するとともに、連携できる人材を育成する共創の場の整備が急務

(5)　競争的資金を活用するための基盤的経費の拡充と研究支援人材の増強

基盤的な経費や人材の不足により競争的資金を十分に活用できていない本末転倒な状況を改善するために、基盤的経費の拡充と研究支援人材の増強が急務

イノベーション創出のために今取り組むべき10の課題

(6)　科学技術外交に関わるキャリアパスの整備

科学・学術分野における我が国の国際連携力を根本から強化する人材として、科学技術外交を担うことが出来る人材の育成とそのキャリアパスの整備が急務

(7)　過度な経営的視点や失敗を許さない前例踏襲主義からの脱却

0から1を創り出すイノベーションを支えるため、経営的な視点に依存しすぎた研究費などのリソース配分を改め、失敗を許容する予算配分や運営を行うことが急務

(8)　教育費の家計負担の低減

大学院生の減少を食い止め、イノベーション人材を供給していくための最も効果的なアプローチとして、教育費の家庭負担をさらに減らすことが急務

(9)　アカデミア自身の“業界体質”の改善

ハードワークを美徳とする業界体質を改善し、形式に囚われず本質を精査して、無駄なコストや自己目的化した活動をアカデミア自らが効率化していくことが急務

(10)　博士号取得者のセクターを越えた活用とジョブ型雇用の推進

多様なセクターでの高度専門人材の活用を推進し、雇用の流動性を高めること、そのためのジョブ型雇用の推進が急務

日本学術会議主催学術フォーラム

2040年の科学・学術と社会を見据えて取り組むべき10の課題

～イノベーション・越境研究・地域連携・国際連携・人材育成・研究環境～

学術関係者、メディア関係者、政策立案者、産業界リーダーらと議論

13:30～13:40　開会挨拶

13:40～14:00
【ミッション・ステートメント】「我々は2040年の科学・学術と社会をどうするのか」

14:00～14:40【講演】「2040年の科学・学術と社会を見据えて取り組むべき10の課題～イノベーション・越境研究・地域連携・国際連携・人材育成・研究環境～」

14:40～15:40【パネルディスカッション】「2040年の科学・学術と社会を見据えて～セクターを越えたリモデリング戦略」

16:00～17:20【全体ディスカッション】「未来を見据えて問い学ぶ良質な学術の気風が満ちあふれる国家を目指して」

17:20～17:30　閉会挨拶

申し込みはこちら▼

https://www.scj.go.jp/ja/event/2023/340-s-0702.html